

電気のふるさと



特集

「協働」と「連携」によるまちづくり⑩

～長野県佐久市「岩村田本町商店街振興組合」の地域活性化事業～

商店街の再生は地域づくりにあり

■わがまち自慢 ～村長室から～

沖縄県中城村

わがまち自慢

村長室から



なかぐすくそん
沖縄県中城村
はまだ けいすけ 村長
濱田 京介



「子育てしやすいまち」 「勢いのある街」として高い評価

喜ばしいことに中城村は、昨年、日本経済新聞による「子育てしやすいまち」ランキングの全国第2位、今年の週刊ダイヤモンド誌の「勢いのある街」ランキングの全国第9位にもランクインいたしました。こうした注目を集めたためか、中城村の人口は今年6月に2万人を突破し、全国でも4番目に人口の多い村となっています。今年9月の1ヶ月間でも人口が73人増加し、世帯数も20世帯増加しました。

8年前に村長に就任して以来、人口が増加し始めていたこの地域を中心に「子育て支援」を行ってきました。「子育て支援」というのは、地域経済や地域振興の根幹となる施策です。まず、取り組んだのが、認定保育所の新設でした。これまで公立の保育所しかなかった中城村に、認可保育所を8か所に増やしました。

また、保育所や病院で働く従業員のための事業所内保育所の設置も進めました。これは沖縄県内では中城村が初めての事例となっています。また、児童の増加に伴って、この地区に小学校も新設しました。

さらに、妊娠・出産への支援として、南上原地区の認定保育所のすぐ隣の敷地に、産婦人科・小児科のある病院を誘致しました。この病院の最大の特徴は「病児保育」を行っている点です。熱を出した子どもを、保護者が仕事を休んで迎えに行かなくてよいように、保育所や幼稚園から直接病院に預かってもらえるようになっています。

これらの子育て支援策に加え、商店、住宅、病院、学校などの整備が進んだことも連鎖して、中城村の人口は増加し続けています。

中城城や護佐丸を 観光資源のみならず地域の誇りに繋げる

子育てしやすい環境を整えるだけでなく、子供たちに地域への愛着や誇りを持つってもらうことも非常に重要だと考えています。

村内にある中城城は、首里城を起点として幸地城、中城、勝連城に至る「ハンタ道」と呼ばれる琉球王朝時代の街道上に位置する城で、琉球史上、重要な役割を担っていました。ご存じのように、世



南上原地区のうえむら病院。右側にあるのは保育園

このことが「子育てしやすいまち」「勢いのある街」としての評価に繋がってきているのではないのでしょうか。人口増加は多くのビジネスチャンスを生み出すという意味では、中城村は非常にポテンシャルの高い村だと感じています。

界遺産に登録されている中城城は、先の大戦で大きな被害を受けることなく当時の姿をそのままに残しています。

また、中城城にまつわる護佐丸盛春という「悲劇の英雄」の物語も有名です。護佐丸は中城の領主で中城城を増築した首里王朝の忠臣でしたが、勝連城の城主・阿麻和利の謀略によって、逆臣とされ

事業所内保育所



整備が進められてきた南上原地区

滅ぼされます。護佐丸は私たちの誇りですが、沖縄県では「郷土史」の授業がなかったためか、あまり知られていませんでした。

そこで、中城村では文科省の教育課程特例校制度を活用し、小学校から中学校1年生までの教科の中に、郷土史を学ぶ「中城ごさまる科」を設けました。このような取り組みが行われているのは県内でも中城村だけです。他地域にも発信していきたいと考えています。琉球史や中城村の歴史・文



世界遺産に登録されている
中城城



中城城の城壁に映し出される、護佐丸と阿麻和利の戦いを物語にしたプロジェクションマッピング



村の台地の端に続く「ハンタ道」



今年5月に開館した
護佐丸歴史資料図書館

化を学ぶことのできる施設として整備を進めてきた「護佐丸歴史資料図書館」も、今年の5月30日（ごさまるの日）にオープンいたしました。郷土史の学習を通して、子供たちが大人になっても地元に誇りや愛着心を持ち続けてくれると、大変嬉しく思います。このことが、村で育った子供たちの定住やUターンにも繋がってくれることを期待しています。

た。これまでに、「中城護佐丸まつり」、歌舞伎の公演、アーティストによるコンサートなど、様々なイベントを開催しています。どのイベントも大好評で、とくに、護佐丸伝説を大迫力の音と映像、演劇で綴る「中城城跡プロジェクト ションマッピング」には、1日で8千人もの観客が訪れます。イベント開催の効果もあり、中城城を訪れる観光客は年間13万人を超えています。

さらなる活性化を
スポーツキャンプや大型MICEの誘致で

さらに、中城村では、スポーツによる地域振興にも力を入れていきます。吉の浦公園のグラウンドなどのスポーツ施設や公共施設を整備し、ガンバ大阪をはじめとしたJ1の3チームのほか、なでしこジャパンのキャンプを誘致しました。これには、2万人ほどの観客が訪れ、大きな話題にもなりましたが、それ以上に効果が期待されるのが子供たちの人材育成です。子供たちは、生でプロの選手を見ることができ、直接指導を受けることができます。サッカー教室にも参加できます。その成果が、中城中学校のサッカー部は元々それほど強くないチームでしたが、今年も県大会に出場するまでに実力をつけました。もともと中城村にはスポーツの素地があり、プロ野球選手、関取力士、ボクシング世界チャンピオンなど、一流選手が中城村から生まれています。スポーツに関心の高い地域でもあります。また、スポーツによって地域を盛り上げ、子供たちにも夢や誇りを持ってもらえる村にしていきたいと考えています。

MICEの誘致などによって、さらに「住みやすいまち」「住み続けたいまち」となるよう力を注いでいきたいと思っています。このような環境で育った子供たちが、大人になってからも地域に愛着を持ち、地元を盛り上げていくことを、切に願っています。（談）

中城城の歴史・文化を子供たちに伝えていくだけでなく、地域外にも発信し、住民にとつて誇りを持てる地域となるよう力を注いでいきたいと思っています。

中城中学校のサッカー部は元々それほど強くないチームでしたが、今年も県大会に出場するまでに実力をつけました。もともと中城村にはスポーツの素地があり、プロ野球選手、関取力士、ボクシング世界チャンピオンなど、一流選手が中城村から生まれています。スポーツに関心の高い地域でもあります。また、スポーツによって地域を盛り上げ、子供たちにも夢や誇りを持ってもらえる村にしていきたいと考えています。

中城村は、昔から農業が盛んな地域でもあります。特に、特産品の『島にんじん』は、沖縄県内の生産量の約7割を中城村が占めています。鮮やかな黄色で、糖度が高く、沖縄料理にも大変よく合う食材として人気があります。村内の事業者は、『島にんじん』を使ったカステラ、ドーナツなども製造しており、私としても、とてもおススメしたい商品です。

村の特産品『島にんじん』

『島にんじん』の加工品



村の東部に広がる海岸線



吉の浦公園のグラウンド

商店街の再生は地域づくりであり



【写真】

- 1 全国初、商店街でのバスケイベント「岩村田バスケ祭」(岩村田本町商店街振興組合提供)
- 2 中山道22番目の宿場町であり、佐久甲州街道や下仁田街道の分岐点
- 3 鎌倉時代に築かれた大井城の城址公園
- 4 昭和40年代に整備された防災建築街区
- 5 カラー歩道のあるアーケードが続く

今回は、長野県佐久市岩村田地区の中山道沿いにある60店舗ほどの商店街が、自立的にまちづくりを推進し、全国から注目を浴びている「岩村田本町商店街」の事例を紹介する。



長野オリンピックの交通インフラ整備により商店街が疲弊

長野県の「東の玄関」と呼ばれる佐久市にある岩村田地区は、古くから中山道の22番目の宿場町・岩村田宿として知られている。佐久甲州街道と下仁田街道などが交差する交通の要衝で、その歴史は古く、鎌倉時代の大井城という城址が残っており、藩政時代は岩村田藩という内藤氏の治める城下町でもあった。佐久地方の「鯉料理」は有名だが、その始まりは、藩政時代の殖産事業だった。その岩村田の中心市街地となるのが岩村田本町商店街である。中山道を挟むように61の店舗が建ち並び、アーケードは南北に210m伸びている。明治以降、佐久地方を代表する商店街として地域住民に親しまれ、昭和40年代頃の高度成長期には、「岩村田へ行けば何でも手に入る」商業集積地として繁栄を極めた。

■佐久市岩村田地区情報■

- 【人口】11,066人(平成28年10月末現在)
- 【面積】423.5km²(佐久市全域)
- 【発電所データ】
中部電力(株)白田発電所
東京電力(株)小諸発電所
- 【本特集問合せ先】
岩村田本町商店街振興組合
URL <http://www.iwamura.com/>





北陸新幹線・佐久平駅

平成に入り、その岩村田本町商店街は大きな転機を迎えることになる。

平成10年開催の長野冬季オリンピックが決まると、上信越自動車道・佐久ICの開業、長野新幹線・佐久平駅の開業などの交通インフラ整備に拍車がかかった。それに伴ってパイパスができ、沿線にはナショナルチェーン店が、佐久平駅周辺にも大型の商業施設が進出してきた。さらには、「車社会」の到来で、住宅や公共施設は郊外に造られていくようになる。

当初、新幹線駅や高速道路IC整備は、地元の人々は大歓迎であった。しかし、人の流れは次第に、西800mに形成された都市型の大店などに変わっていき、岩村田本町商店街は疲弊していった。

この状況に危機感を持ったのが、商店街の跡取り息子たちであった。彼らは、東京をはじめとした大都市に「修行」に出ていた者が多く、帰ってきて初めて、商店街の未来について大きな危惧を覚えることとなる。

彼らが属した青年会は、将来のあり方を巡って、商店街組合の役員たちと衝突・対立していった。

平成8年、旧世代の役員に代わって、青年会を中心とした若手経営者が役員に就任する。平均年齢

イベントで知名度は上がるも 売り上げは伸びず

「旧世代の役員との衝突・対立はどこの商店街にもありますが、私たちがうまくいったのは、若手の熱意が旧世代を上回っていたことと、この岩村田という土地柄も大きいでしょうね」と、岩村田本町商店街振興組合の理事長を務める阿部眞一あべしんいちさんは言う。

昔から、この地域は常に旅人を受け入れてきた町であり、進取の気性あふれる文化が根づいていたという。

新しい役員体制で取り組んだのは、「岩村田本町商店街」の名を全国に知らしめ、活性化を行うことだった。そのために、様々なイベントを行って話題を集めることに注力した。

毎回数千人を集めることとなる「日本一に挑戦シリーズ」と銘打つイベントがそれだ。南北に長い商店街にちなんで、全長200mの「日本一長い草もちを作ろう大作戦！」や「日本一長いりんごのロールケーキを作っちゃおう大作戦！」などではテレビ取材も数多く来た。また、ケーキと景気

36・7歳の理事たちだった。そして「商店街振興組合」という法人格を取得し、全国商店街振興組合連合会に加盟した。

をかけた「ケーキ時計シリーズ」のイベントは『日経ビジネス』の表紙にもなった。

「そこで、私たちはまだまだやれる、と自己満足に陥ったのです。人が集まればお金が落ちると考えていたのです」と阿部さんは言う。

ところがそうではなかった。人が集まっても、買物をするのは佐久平駅に近い大型店舗であった。イベントが終わると、人々は大型店舗に流れていった。イベントによる集客だけでは食べることはできないことが分かったのだ。 「全国的に有名になって、イベントでの団結力も上がって、地域のヒトも応援してくれたのですが、やはり、お金を落とさなければいけない商店街にならなければだめだと



岩村田本町商店街振興組合理事長阿部眞一さん。全国商店街振興組合連合会副理事長でもある



「日本一長いりんごのロールケーキ」を作るイベント

どに分類して、商店街をもう一度見つめ直したのである。

最初に、中小企業診断士の門をたたいた時、「お前たちは経営者になれない」とダメ出しされたのだが、その時の悔しさが、1年間徹底して勉強したことのモチベーションになった。

この勉強が大きなターニングポイントになっていくことになる。勉強を通して、何が問題で、どのような商店街にしていけばよいかを模索した結果、目指すべきは、地域を見直し、地域住民とともに商店街を創り上げる『地域密着顧客創造型商店街』というものであった。

まず、商店街の半径300mにどのくらいの顧客がいるかを調べた。おばあちゃんが毎日ビニール袋を持って往復できるのは、半径300mだからだ。そこには560世帯、1,000人くらいのお客さんがいた。彼らこそが、自分たちが生きていくための「空気と水」とも言えた。そこでコンセプトを『地域の皆様とともに、暮らす・働く・生きる』とした。

最初に取り組んだのが 空き店舗対策

振興組合が最初に訴えたのは、商店街の店主たちの意識改革だった。それまでは「売ってあげる」という殿様商売的な店主が多かつ

た。「地域の人々が必要としているものは何で、どのようなサービスを提供していかねければならないか」という、文字通りの「地域



コミュニティスペース「おいでなん処」には表彰状が飾られている



惣菜などが売られている「本町おかず市場」



「岩村田コンサルジュ」はまちの案内所



チャレンジショップ「本町手仕事村」

密着型商店街」への意識改革であった。となると、必然的に地域における商店街の役割を明確にしていく必要があった。商店街はコミュニティの担い手として、どうあるべきかという発想だった。商店街には、安心・安全、福祉、環境、食育、高齢者の相談相手、子育て、教育、文化の創造、歴史の伝承など多くの役割がある。積極的に、その役割を担っていかうというものであった。

一言で言えば、「地域を元気にする」という大きな役割が商店街にはある、という気づきであった。同時に、それぞれの店舗の「健康状態」を調査した。その結果、空き店舗は42店舗中15店舗あった。また、後継者がなく、廃業しそうな店は10店舗に上り、空き店舗対策は必須の課題であった。まず、イベントなどで提案型のアンケートを実施して、地域住民のニーズを掘り起こした。そして、空き店舗が出てから考えるのでは遅いので、出たときに即座に対応できるように、地域住民のニーズに対応する事業を、「事業カード」として蓄積していった。そうした作業を経て、平成14年に、地域住民が自由に使えるコミュニティスペース「おいでなん処」を開設。平成15年に、後のコミュニティビジネスのモデルとなる、家庭料理の惣菜の『本町おかず市場』を開設した。これは商店街の女将さんたちの強い要望によって実現した。平成16年には、チャレンジショップ『本町手仕事村』を開設する。地域内外から起業希望

者募集し、安価な家賃で事業を開始させ、軌道に乗れば、他の広い空き店舗を斡旋して開業させるというものだ。こうした事業の結果、5店舗の空き店舗を解消した。その後の事業でもこの空き店舗対策は続き、平成28年現在、空き店舗は3店舗までに減少した。

地域は「畑」、商店街は「野菜」である

平成17年、振興組合は「都市再生整備計画」に関わる岩村田地区活性化構想」を、独自で策定する。それに基づき、平成19年、「子育て村」制度を開設。これは、子育て世代を対象とした商店街会員制度で、1年に13〜15回の子育てイベントを開催して、その中で、必ずアンケートを実施して会員のニーズを探り、新たな事業を模索していった。

平成21年、そのアンケートから、商店街直営の学習塾『岩村田寺子屋塾』を開設する。地域で子どもを見守り、学習支援を商店街で行うという全国初の試みであった。現在は、不登校や発達障害を持つ子供も受け入れている。平成25年には、茨城の鹿島学園の要請を受けて、商店街が直営する『学校法人鹿島学園通信制高校佐久キャンパス』を併設した。ここで高



「岩村田寺子屋塾」



塾には「学校法人鹿島学園通信制高校佐久キャンパス」が併設されている



「子育てお助け村」

校の3年間、通信制のカリキュラムで勉強すれば高校卒の認定を受けることができる。これも全国初の試みであった。「普通、通信制高校は自宅学習が主で、何回かスクーリングに参加して単位を取るわけですが、これではしっかりと勉強できない。ここでは、生徒の状況に応じてここに来る日数を選べます。制服もありません。子供たちは商店街のイベントには必ず参加、準備やお手伝いを通して商店街の人々に関わります。また、商店街の店舗や関連企業で就業体験をしたりして、自分のできることを見つけ、自信

果、5店舗の空き店舗を解消した。その後の事業でもこの空き店舗対策は続き、平成28年現在、空き店舗は3店舗までに減少した。



「岩村田寺子屋塾」塾長の細川保栄さん。振興組合の理事でもある

を持つようになり。彼らは商店街とともに育っていきます。この取り組みは、若者がこの街に愛着を持ち、ここで自立し、将来的にここで働いてくれるようになる仕掛けの一環です」と、振興組合理事で『岩村田寺子屋塾』塾長の細川保栄さんは語る。

平成22年には、託児所とサロンを兼ね、年配の保育士に相談できる『子育ておたすけ村』も開設した。こうした活動が認められ、平成22年に『つけい子育て支援大賞』を受賞した。また、地域が直面するさまざまな課題を自らの手で解決して、住



佐久っ子ワオンカード

ていった要因の
ひとつに、新幹
線佐久平駅近く
へのイオンの進
出があった。そ
のイオンと提携
するといふのだ

は地域づくりにあるということだ
と思います。地域を「畑」、商店
街を「野菜」とすれば、地域とい
う「畑」が耕されていないと、私
たち「野菜」は育たない。だから
自力で地域を耕しているのです」
理事長の阿部さんのこの言葉は
示唆的である。

平成21年、本町商店街振興組合
が作成した「岩村田地区活性化構
想」をもとに、「地域商店街活性
化法」に基づく活性化計画事業を
経済産業省に提出して、第一次認
定を受ける。
その助成金や佐久市の助成金を
活用して、その後様々な認定事業
を推進することになるが、そのキ
ーワードは「連携」にあった。
中でも、大手流通グループ・イ
オンが発行しているICカード型
前払い電子マネー『WAON』と
連携した「佐久っ子ワオンカード」
事業は、注目を集めることになる。
かつて岩村田本町商店街が疲弊し

この提携は、商店街の店主にと
って、自らを見つめ直していく契
機ともなった。「何でも買える」
イオンに対し、商店街で買い物
していただくためには、それぞれ
の店が、「自らの魅力」を磨き上
げていかねばならない。また、き
め細かな接客の中で、顧客それぞ
れのニーズや好みを知り、それ
にあった商品を提供していくとい
う、売り手と買い手の距離が近い、本
来の「まちの商店街」の魅力の再
確認であった。

平成23年、若い世代を商店街に
巻き込む『高校生チャレンジシ
ョップ』を開設した。さらに地域
ブランド創生事業として『三月九日
青春食堂』を開設し、高校生との
コラボメニューなどを開発した。
高校生との「商学連携」による、
新たな事業の可能性を探るもので
あった。
このように、商店街の後継者だ
けでなく、若い世代との連携も重
視。今でも様々なイベントが商店
街主催で行われるが、地域の若い
世代はイベントなどに参加してき
ており、彼らからの企画も積極的
に取り入れている。商店街の後継
者だけでなく、「地元をなんとかし
たい、楽しいまちにしたい」とい
う企業、NPO法人、学生、農業
従事者、地域住民などとの連携を
今後も進めていく。
「私たちの塾では、勉強だけで

「連携」はまちづくりのキーワード

み良い地域社会の創造を目指し、
独自の発想により全国各地で活動
に取り組んでいる地域活動団体・
企業等の活動に対する「あしたの
まち、くらしづくり活動賞・内閣
総理大臣賞」を、平成23年に受賞
した。

から、極めて画期的なことであっ
た。イオンも地域貢献という意味
で積極的に提携してくれた。
このカードは、1枚で『WAON』
と『佐久っ子』の2種類のポ
イントを貯めることができる。将
来は『地域通貨』としての機能を
持たせることも目指す。現在、加
盟店舗は70店舗、カードホルダー
は約2万5,000名だ。



高校生とのコラボメニューもある「三月九日青春食堂」

なく、こうしたチャレンジシヨッ
プや青春食堂での体験をさせてい
ます。農家との連携も進めていま
す。つまりは、地域の人材は地域
で育成していかなければならない
ということですよ」と、前述の細川
さんは語る。
今後の課題は、やはり商店街の
後継者づくりだ。現在行っている
のは若手の「人材育成塾」。その
他、他地域から来たチャレンジシ
ョップ『手仕事村』の若い人たち
や、『つどいの館 中道岩村田宿
こてさんね』に出店している若い
人たちとの勉強会なども、商工会
議所などと連携しながら行ってい
る。この『こてさんね』は昨年、
振興組合がデベロッパになって、
開設した多目的商業施設。飲食店
とイベントスペースで構成されて
おり、若手飲食事業者のチャレン
ジシヨップでもある。振興組合は、
地域外から来た『手仕事村』や『こ
てさんね』の若手事業者たちが、
従来の店の後継者とともに、岩村
田商店街の将来を担うことを期待
している。

「まだまだ、やりきっていませ
ん。商店街のハード整備など大き
なプロジェクトが残っています。
ただ、この20年を振り返れば、人
の重要性を感じます。お互いの理
解、価値観の共有を図ってきたこ
とが、今まで頑張ってきた要
因かと思っています」
最後に、集客力アップのコツを
阿部さんに聞いた。

「それぞれが、輝く店にしてい
くための努力を怠らないこと。輝
く店の集合体こそが人が集まる商
店街です。また、まちに必要な機
能を整備して、賑わいの創出に必
要な機能をまちに充足させること。
この2つが『集客力アップ』の両
輪だと思っています。」
阿部さんが合言
葉のように常に言
うのは「右手にそ
るばん、左手に地
域コミュニティの
担い手」というも
の。ここに商店街
活性化のヒントが
あるように思える。



昨年開設した多目的商業施設「こてさんね」。イベントスペースもあり「婚活」などに活用されている



「こてさんね」には若手飲食事業者のチャレンジシヨップが並ぶ

振興トピックス

このコーナーでは、主に電源地域の地域活性化に向けたソフト事業の話題を取り上げています。今回は福島県広野町での催し、青森県下北地域、島根県松江市の取り組み、福島県相双地方Passion物産展の様相を紹介します。



10数ヶ国の約2000人が参加した 国際フォーラムが開催される

福島県広野町

地図 A

平成28年11月25日(金)から27日(日)まで、3日間にわたって福島県広野町をメイン会場にした「国際フォーラム・被災地から考える」が開催されました。日本や米国、フランス、ドイツ、スペイン、ベトナムなど10数ヶ国から約2000人が参加して、被災地の課題を共有し、復興のあり方などについて討議されました。

この国際フォーラムは、町などがつくる「国際フォーラム企画運営会議」が主催し、事務局は広野町復興企画課に置かれています。2014年から続けて3回目の開催で、公開討論会や研修報告会、体験型講習会など、広野町、楡葉町などの会場で22の関連行事が行われました。



(上)開会式の模様
(下)オープニングセッション

25日は、開会式に続き、オープニングセッション「世界におけるフクシマ」が開かれました。このセッションでは、各国の大使館員や有識者による、本国におけるフクシマの発表を通じて、今後、どのような取り組みを行うことが、より良い相互理解につながるかが話し合われました。また、同日の高校生による演劇パフォーマンスでは、ふたば未来学園高校の1年生11人が、被災地の課題を題材にした演劇を上演し、自らが先頭に立って動くという力強いメッセージを発信しました。

さらに、「海外専門家との個別対話からの本音」と題された公開討論会では、インドネシアやスリランカの研究者が、2015年に行われた仮設住宅の住民との対話の内容を報告しました。この中で、「帰還にあたって、仮設住宅での生活を通じ生まれたコミュニティが無くなってしまうことに不安を感じて

いる」といった住民の本音が報告されました。こうした報告を通して、被災地の現状にかかわる様々な意見が交わされました。26日には、福島県浜通りの高校生が、今夏にベラルーシのチェルノブイリを訪問して学んだ「日本ベラルーシ友好訪問団2016」の成果報告が行われました。その他に、いわき市在住の外国人青年たちとの交流や、いかに福島と海外をつなぐかという視点で、通訳案内士の発表



ふたば未来学園高校の1年生による演劇パフォーマンス

地域の取り組みが実を結び 「下北ジオパーク」認定へ

青森県下北地域
地図 B

青森県下北半島のむつ市、大間町、東通村、風間浦村、佐井村の5市町村をエリアとする「下北ジオパーク」が、9月9日に新たに「日本ジオパーク」に認定されました。

「ジオパーク」とは、「地球・大地(ジオ・Geo)」と「公園(パーク・Park)」とを組み合わせた言葉で、「大地の公園」を意味します。美しい自然景観を意味します。美しい自然景観や学術的価値を持つ自然遺産、それらと深くかかわりのある歴史や文化も対象になります。

本州最北に位置する「下北ジオパーク」は、「海と生きる『まさかり』の大地」本州最北の地

に守り継がれる文化と信仰」をテーマとしています。地質や文化・歴史を感じることができるところは「ジオサイト」と呼ばれ、恐山や仏ヶ浦、大間崎、尻屋崎など16か所のジオサイトでは、特徴的な地形・地質などの自然環境だけではなく、そのなかで育まれてきた生態系や歴史・文化・産業なども紹介されています。

クに対する住民意識が低く、住民活動も希薄であるなどの理由で認定見送りとなっていました。見送り後、地域住民の意識を高



(上) 仏ヶ浦ジオサイト (下) 脇野沢・鯛島ジオサイトを望む公園清掃

め、活動を活性化させるべく、講演会の開催や出前講座を実施。また、学校教育にもジオパークを取り入れ、ジオパークの基本的考えの普及を行ってきました。さらに、市町村や研究機関、民間団体で組織する推進協議会メンバーによる担当者会議を毎月開催するなど、住民に

よるボトムアップ型推進体制の構築に努めてきました。

その結果、地域の機運が高まり、住民主導による地域資源の保全と観光・教育への活用が進んだことから、ジオパークの認定に至りました。

「北北ジオパーク」は日本ジオパークへの認定にとどまらず、世界ジオパークへの認定も目指しています。ジオパークへの認定を機に、今後ますますの地域振興と地域教育の促進、それに伴う地域交流人口拡大と郷土愛の醸成が期待されています。

「Passion物産展」を 東京都中央区で開催

福島県相双地方
地図

相双地方の特産品をPRする「福島県相双地方Passion物産展」が「日本橋ふくしま館（東京都中央区）」で開催されました。

物産展では、品評会で2年ぶりに3回目の金賞を受賞した醤油（相馬市）や、ご当地グルメの最高峰『なみえ焼きそば』（浪江町）、清らかな水で育った、いわなのブランド『あぶくま川内』（川内村）、最新の農法で育てた

トマトをはじめとした農産物や、その加工品（新地町）など、おいしい食べ物が盛りだくさんの品揃えとなりました。また、南相馬市の職人が丁寧手作りしているガラスアークセサリーや、大熊町民がひとつひとつ絵付けをしている『おおちゃん興き上がり小坊師』などが、訪れた人々の人気となりました。

復興に向けて相双地方の食の魅力と安全を発信するという、事業者の勢いを感じさせる物産展となりました。

食を通じて地域を見直す 「食の縁結び甲子園」をしまねで開催

島根県松江市
地図

第1回「食の縁結び甲子園」全国大会が、平成28年11月12日（土）、島根県松江市で開催されました。これは、「縁結びの地」しまね」で開催する高校生を対象とした料理コンテストです。



料理コンテスト

全国各地の食材と島根県産の食材を組み合わせたメニュー開発や料理コンテストを通じた参加者同士の交流から、高校生のコミュニケーション能力、地域理解と貢献意欲を育てることを目的とした取り組みとなっています。

料理のテーマは「地域を元気にする」お米を使った縁結びランチ」。島根を代表する食材である和牛肉、しいたけ、しじみから1品以上選択し、出場チームのPRしたい地元食材を組み合わせたメニューを考案・調理

しました。さらに、料理をPRするプレゼンテーションと合わせて、総合審査により優勝校を決定します。

島根県予選を勝ち抜いた松江農林高等学校、松江養護学校に加え、全国7地域からの8チーム、合計10チームが、オリジナルメニューで競いました。



観光案内のようす

三笠ワインで煮込むなどのアイデアが評価されました。準優勝には、葛飾ろう学校（東京都）と湯本高等学校（福島県）が輝きました。

翌日は、出場した全国各地の高校生をもてなすために、観光の授業に力を入れる松江市立女子高等学校の生徒が案内役となり、出雲大社や玉造温泉街といった、しまねの観光地の見どころを女子高生の視点で紹介しました。

(左・下) 物産展のようす



春の訪れを告げる幻の野菜

ふくたち

うごまち
秋田県羽後町
地図 ⑤

『ふくたち』は秋田県南部でしか栽培されていない冬野菜で、県南を少し離れると、その名前さえ知られていない、“幻の野菜”です。『ふくたち』の栽培には白菜の種を使用しますが、その姿と甘さは白菜とは全く違います。『ふくたち』は、真冬に育てることで、葉の中の花芽に栄養と甘さが凝縮され、雪解けとともに芽を伸ばし始めた状態で収穫されます。その旬は、3～4月のわずか2ヶ月間。雪深く冬の長い秋田県南地区の食卓に、春の訪れを感じさせてくれる食材です。

DATA

【お問合せ】JAうご ☎0183-62-1120
【URL】http://www.ja-ugo.jp/sub_nou/fukutachi.html



幻の野菜『ふくたち』



ふくたちとベーコンの炒め物

電源地域情報ひろば

特産品 開発情報



本格的な十割そばをご賞味ください

古くから京都の食文化を支えた海の恵み

若狭ぐじ

ちよう
福井県おおい町
地図 ⑥

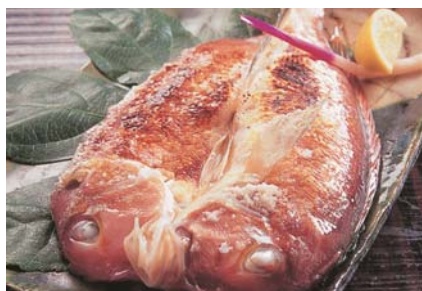
若狭湾で獲れるアカアマダイは『若狭ぐじ』と呼ばれ、古くから鯖や若狭がれいととも、鯖街道を通過して京に運ばれていました。鯖街道の起点である小浜港に水揚げされる『若狭ぐじ』の約9割は、おおい町大島地区の船が釣り上げたものです。

その上品な甘さ、気品漂う姿から、今なお京料理には欠かせない高級食材となっています。漁法、鮮度、姿形、重さなどの基準により厳選されたものだけが『若狭ぐじ』を名乗ることができます。

『若狭ぐじ』は味や姿の美しさ、取り扱いを含めて全てが特別な逸品なのです。



自慢の若狭ぐじ



舌の上にふわりと広がる上品な甘み
若狭ぐじの若狭焼き

DATA

【お問合せ】大島漁業協同組合
☎0770-77-0162

本格派のそばをご家庭で

ひがしどおり十割そば

ひがしどおりむら
青森県東通村
地図 ⑦

古くから愛されている「東通そば」をイメージし、東通村産のそば粉と、つなぎを一切使わない「十割そば」に、とことんこだわって作り上げました。地元で収穫する良質な玄そばの風味を生かすべく、石臼製法で丁寧に粉挽きしており、太目の食感で、そば本来の香りが楽しめます。そば粉100%だからこそ、茹で汁はそば湯としても楽しめます。そばつゆも尻屋産コンブにこだわりました。

DATA

【お問合せ】東通村産業振興公社
☎0175-47-2115



新商品『ひがしどおり十割そば』

刺身にしてよし! 鍋にしてよし!

御前崎クエ

おまえざき
静岡県御前崎市
地図 ⑧

御前崎市内の「静岡県温水利用研究センター」では、卵からクエの稚魚を育てる「完全養殖」に成功し、小型でおいしい生後1～2年の『御前崎クエ』を市内各店へ提供しています。身は透明感があり、しっかりとっていて、刺身にする、その食感の良さのなかに旨味が感じられます。また、鍋の具材としても人気です。『御前崎クエ』を使用した料理は、旬となる11月から3月まで、市内の各取扱店で味わうことができます。御前崎の冬の味覚を、ぜひ一度ご賞味ください。

完全養殖に成功した『御前崎クエ』



DATA

【お問合せ】御前崎クエ料理組合
☎0548-63-2001 (御前崎市観光協会内)
【URL】<http://www.omaezaki.gr.jp/>



『御前崎クエ』の姿造り

赤穂牡蠣

あこう
兵庫県赤穂市
地図①

赤穂市が面する坂越湾では、山からのミネラルと栄養分、良質なプランクトンを含んだ千種川の水が流れ込み、カキが大きく成長することができます。『赤穂牡蠣』は身が大きく、甘みが強く、「えぐみ」が少なく、さらに熱を加えても縮みにくいというのが特徴です。旬となる11月下旬～2月下旬にかけて、市内の様々なジャンルの飲食店で、料理人が作る自慢のカキ料理を楽しむことができます。

DATA

【お問合せ】赤穂市建設経済部産業観光課
観光係 ☎0791-43-6839
【URL】<http://www.city.ako.lg.jp/index.html>



『赤穂牡蠣』

古くから使われる伝統食材

かんのくら 三朝神倉大豆

みささちょう
鳥取県三朝町
地図①

三朝神倉大豆は、元々は神倉集落の数戸の農家で古くから作り続けられていた、この地在来の大豆です。近年、タンパク含量、全糖含量、イソフラボンが多いという特徴が明らかになり、特産品の開発が進んでいます。神倉大豆本来の旨みを存分に味わえる納豆『神のつぶ』、大豆本来のコクと甘みを楽しめる豆腐『神のはな』、まろやかで飲みやすい豆乳『神のしずく』、心地よい柔らかさの大豆水煮『神のつぶみ』など、いずれの商品とも、味の評価が高く、人気の商品となっています。

DATA

【お問合せ】JA鳥取中央
☎0858-28-2825
【URL】<http://www.ja-tottorichuou.or.jp/>



神倉大豆



神倉大豆を使用した商品

瀬戸内の冬の味覚

ガザミ

うべ
山口県宇部市
地図①

宇部市近海は、瀬戸内海のなかでもガザミ（ワタリガニ）の最大の漁獲量を誇ります。一般的な旬は、メスが卵を持つ11月下旬から3月にかけてですが、宇部では、最もおいしい時期とされる1～2月にも、小型底引き網漁業により安定した漁獲量があるのが強みです。茹でても、焼いても、蒸しても、その繊細な甘さ、独特のほのかな香りを楽しむことができます。市内でも、一部の店でしか食べられないので、予約は必須です。



ガザミ蒸し



特産のガザミ

DATA

【お問合せ】宇部市産業振興部 水産振興課
☎0836-34-8370
【URL】<http://www.city.ube.yamaguchi.jp/index.html>

栗より甘い!

金太郎芋

いがたちょう
愛媛県伊方町
地図①

伊方町佐田岬は、その土質、自然環境がサツマイモの栽培に適しており、産地としても有名です。『金太郎芋』はベニアズマという品種のサツマイモで、愛媛県の「ふるさと農産物」にも指定されている佐田岬の特産品です。その味は「栗より甘い」との定評があり、全国的に人気となっています。掘りたては、まさに栗のような食感で、2ヶ月ほど熟成させることでさらに甘みを増します。その甘みを活かしたスイーツなどの加工品も、おすすめの逸品です。

『金太郎芋』



『金太郎芋』の甘みを活かした商品

DATA

【お問合せ】伊方町産業建設課農林水産室
☎0894-38-2651
【URL】<http://www.town.ikata.ehime.jp/>



掲載のご希望がございましたら、電気のふるさと編集室(☎03-6372-7305 E-mail: furusato@dengen.or.jp)までお知らせください。掲載費用が発生することはありません。(編集の都合上、掲載できない場合がございますことを予めご理解願います)

第59回元祖わんこそば全日本大会

はなまき
岩手県花巻市
地図 M

わんこそば発祥の地ともいわれている花巻市で、毎年開催される「元祖わんこそば全日本大会」は、行司姿の審判と力士ならぬ“食士”が登場する、まさに“食の格闘技”です。大食い・早食いのイメージが強いわんこそばですが、本来は温かいそばがのびないよう少量ずつ給仕するという、お客さまへのおもてなしの心を大切にされた郷土料理です。イベントでは、そばにあう地場産品グランプリ、台湾フードコーナー＆物産コーナーなど、“食士”でなくとも楽しめる催しも用意されています。



熱気あふれるわんこそば競技



わんこそば競技小学生の部

DATA

【開催日】2月11日(土・祝)
【会場】花巻市文化会館
【お問合せ】公益社団法人
花巻青年会議所 ☎0198-24-2025
【URL】<http://www.hanamaki-jc.com>

雪で遊ぼう!

第6回美浜冬まつりin新庄

みはまちょう
福井県美浜町
地図 N

「美浜冬まつりin新庄」は、美浜町新庄地区の『溪流の里』で開かれる冬まつりです。雪山での謎解きウォークラリーや冬の溪流釣り、スノービークル体験などのアトラクションは、子供たちに大人気の催しとなっています。その他、ステージイベントが催されるほか、「お菓子まき」、「つきたて餅ふるまい」など、盛りだくさんのイベントです。屋台では、温かい食べ物やホットドリンクも用意して、皆さんのお越しをお待ちしております。海だけではなく、美浜の雪山の魅力も楽しめるイベントとなっています。

子供たちに大人気のBIGソリスベリ台



DATA

【開催日】1月29日(日) 【会場】新庄溪流の里
【お問合せ】美浜新庄冬まつり実行委員会
【URL】<http://mihama-shinjo-snowfesta.jimbo.com/>

鬼が福を呼ぶ!?

鬼岩福鬼まつり

みずなみ
岐阜県瑞浪市
地図 P

鬼岩公園に伝わる「鬼の岩屋伝説」をもとにした節分のお祭り。伝説では悪事を働いて、近郷の住民を苦しめた「閻の太郎」が、福鬼として蘇って厄払いするため、鬼への愛着を込めて「鬼は内、福は内」の掛け声で豆撒きを行います。イベント中には会場内を鬼が巡回し、その迫力は泣き出す子供もいるほどです。ほかにも、県内外から集まった踊り子たちによるバサラ踊りや、豪華景品が当たるビンゴ大会など、楽しい催しが満載のイベントです。

DATA

【開催日】2月4日(土)
【会場】鬼岩ドライブイン駐車場内
【お問合せ】鬼岩観光協会 ☎0574-67-0285
【URL】<http://www.oniwaonsen.com/index.htm>

電源地域情報ひろば

イベント 情報



大勢の人で賑わう会場



大迫力の雪像

地域資源の「雪」で まちおこし

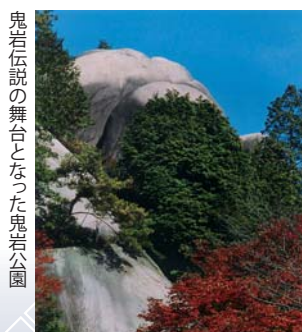
第35回 いいやま雪まつり

いいやま
長野県飯山市
地図 O

新潟県との県境にある豪雪地帯である飯山市。負担となる雪を地域の「資源」と捉え、地域の活性化を図ろうという、地域の若者の想いから生まれた「いいやま雪まつり」は、今年で35回を迎えます。手作りの雪見灯籠や雪像など、街全体が雪の芸術で彩られます。飯山の夏の火祭りである「奈良沢大天狗」の実演や、勇壮な雪中神輿の練り歩きなどの催しでは、伝統芸能を堪能できます。他にも、ステージライブ、キッズイベントなど、2日間にわたって楽しい催しが満載のイベントです。

DATA

【開催日】2月11日(土・祝)・2月12日(日)
【会場】飯山市城北グラウンド周辺
【お問合せ】いいやま雪まつり実行委員会
☎0269-62-0156
【URL】<http://www.isnowfes.org/index.php>



鬼岩伝説の舞台となった鬼岩公園



福鬼太鼓のパフォーマンス



松明を掲げる上り子たち



「火の滝」「下り竜」に例えられる祭りの様子

日本最古の火祭り お燈まつり

和歌山県新宮市
地図

DATA

【開催日】2月6日(月) 【会場】神倉神社
【お問合せ】新宮市商工観光課
☎0735-23-3333
【URL】<https://www.city.shingu.lg.jp/forms/top/top.aspx>

「お燈まつり」は、日本最古の火祭りといわれる由緒ある祭りです。世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の一部である神倉神社で開催され、国の重要無形民俗文化財にも指定されています。この祭は火の洗礼を受けるものとして始められたもので、白装束に荒縄を締められた約2,000人の「上り子」と呼ばれる男衆が、御神火を移した松明を持ち、神倉山の山頂から538段の急峻な石段を駆け下ります。その壮観さは、「火の滝」「下り竜」に例えられています。

桃の香りに誘われて 倉敷雛めぐり

岡山県倉敷市
地図

白壁の土蔵が建ち並ぶ町並みで知られる岡山県倉敷市。『倉敷雛めぐり』は、旧家、老舗商店から商店街まで、町のあちこちに江戸時代の「享保雛」をはじめ、備前焼や陶器、現代作家の手による木彫りの雛人形まで様々な雛人形が飾られ、華やかに彩られます。飲食店やホテル・旅館等では、雛祭りにちなんだオリジナル料理を味わうこともできます。倉敷の情緒ある町並みのなか、雛人形との出会いを求めて散策を楽しんでみてはいかがでしょうか。

DATA

【開催日】2月25日(土)～3月12日(日)
【会場】倉敷市内
【お問合せ】倉敷雛めぐり実行委員会事務局
☎086-421-0224
【URL】<http://kankou-kurashiki.jp>



様々な雛飾りが座敷を彩る



珍しい雛人形にも出会えます

アイルランドの文化を楽しむ

アイリッシュ・フェスティバル in Matsue

島根県松江市
地図

松江ゆかりの作家、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)のルーツの地であるアイルランドの文化を楽しむイベントです。「セント・パトリックス・デー・パレード」では、シンボルカラーである緑の衣装を身に着けた人々が行進し、町中が鮮やかに彩られます。また、国宝松江城のお堀を巡る遊覧船での水上パレードは、松江ならではのものです。アイルランド音楽、ダンスなどのパフォーマンスで会場を盛り上げてくれるほか、「アイリッシュ・パブ」、「グリーンマルシェ」、「アイルランドショップ」などではアイルランド料理も満喫できます。



パフォーマンス



水上パレード

DATA

【開催日】3月12日(日) 11:00～
【会場】松江城大手前～カラコロエリア
【お問合せ】アイリッシュ・フェスティバル in Matsue
実行委員会事務局 ☎0852-31-8345
【URL】<https://www.facebook.com/ifmatsue>

早春の唐津の名勝・絶景を巡る

唐津・虹の松原ツデーウォーク

佐賀県唐津市
地図

「美しい日本の歩きたくなるみち500選」にも選定された、唐津・虹の松原を歩くウォーキングイベントが、来年3月に開催されます。

名勝「虹の松原」や「唐津城」、佐用姫伝説で知られる「鏡山」、日本の滝百選に選ばれた「見帰りの滝」など、唐津の豊かな自然と旧跡を巡る5～45kmのコースが用意されており、2日間で各地を巡ることができます。全国から参加者が集うイベントとなっており、歩くだけでなく参加者との交流も楽しめるのが、このイベントの醍醐味です。

DATA

【開催日】3月18日(土)・19日(日) 【会場】浜玉公民館
【お問合せ】一般社団法人 唐津観光協会
☎0955-74-3355
【URL】<http://www.karatsu-kankou.jp/>



毎年大勢の参加者が集う

日本の三大松原に数えられる「虹の松原」でのウォーキング



掲載のご希望がございましたら、電気のふるさと編集室(☎03-6372-7305 E-mail: furusato@dengen.or.jp)までお知らせください。掲載費用が発生することはありません。(編集の都合上、掲載できない場合がございますことを予めご了承願います)

Information
**第46回電源地域
 振興担当者講習会
 を開催します**

平成29年1月13日(金)の午前10時から午後5時まで、東京・築地の全国情報サービス産業厚生年金会館(ＪＪＫ会館) 2階多目的ホールにおいて第46回電源地域振興担当者講習会を開催します。

この講習会は当センターが主催で開催しており、毎回、全国の電源地域立地市町村をはじめ、地域振興に関係ある皆様にご案内しております。国の諸政策や、専門家による講演、事例発表など、地域振興関連の諸情報を得ることができると、毎回ご好評いただいているものです。



昨年の電源地域担当者講習会

今回の講習会では、経済産業省地域経済産業政策課、復興庁、資源エネルギー庁電力基盤整備課、資源エネルギー庁原子力立地・核燃料サイクル課、総務省地域力創造グループ地域政策課から平成29年度の各予算(案)や政策等についてご説明をいただきます。

また、東北経済産業局東日本大震災後の復興状況と課題、日本原子力発電株式会社廃止措置プロジェクト室から廃炉計画に関する基調講演をいただく予定です。

【お問い合わせ】
 地域振興部 振興業務課
 (研修事業担当)

☎03-6372-7305
 ①www2.dengen.or.jp/html/works/kensyu/index.html
 ✉kensyu@dengen.or.jp

Information
研修事業のご案内

当センターでは、平成29年1月にNo.4「地域農業の活性化策を学ぶ」、2月にNo.5「地域の特産品のブランド化支援」の研修を実施する予定です。

No.4「地域農業の活性化策を学ぶ」の開催日は平成29年1月27日(金)、定員は20名です。

本研修では、日本の農村地域の農業の現状および国の政策等の観点から、これからの地域農業の目指す方向や活性化策(6次産業化、農商連携)ならびに新しい農業ビジネスについて学びます。

研修講師はNPO法人えがおつなげて代表理事の曾根原久司氏、奈良先端科学技術大学院大学の光井将一客員准教授を予定しています。

No.5「地域の特産品のブランド化支援」は平成29年2月に予定しています。本研修では、売れる商品と売れない商品の違いがどこにあるか、バイヤーが仕入れた商品とは何かを成功例、失敗例を元に学びます。また、

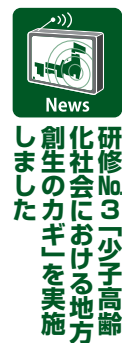


研修No.3「少子高齢化社会における地方創生のカギ」講師との意見交換

地域特産品開発のポイントや売れる商品づくりのノウハウ、販路開拓を行う上での基礎知識等、地域の特産品のブランド化支援などについて学びます。

【お問い合わせ】
 地域振興部 振興業務課
 (研修事業担当)

☎03-6372-7305
 ①www2.dengen.or.jp/html/works/kensyu/index.html
 ✉kensyu@dengen.or.jp



電源地域振興センター会議室において、研修No.3「少子高齢化社会における地方創生のカギ」が開かれました。

第1日目は、法政大学名誉教



研修No.3「少子高齢化社会における地方創生のカギ」ワークショップ

授の岡崎昌之先生より、『地域は消えない(少子高齢化を見据えた新しいまちづくり)』というテーマで基調講演していただきました。講演で岡崎先生は、「人口減少社会を乗り越えていくためには、『応援人口』、『関心人口』、『活躍人口』をいかにして増加させるかが大事」といった視点を強調されました。さらに、そのための自治体と住民のとの協働の重要性についてお話しされました。

それに続いて、株式会社kedama代表取締役の武田昌大氏、みんなの孫プロジェクト代表の水柿大地氏による過疎地域における地域活性化の取り組みをご紹介します。武田氏からは、クラウドファンディングを活用した地域振興の取り組みについてご紹介いただきました。また、水柿氏からは、地域おこし協力隊としての活動経験をもとにした地域づくりの取り組みをご紹介いただきました。

翌日は、「少子高齢化の波を乗り越える」というテーマでのワークショップを開催し、

参加者たちが意見やアイデアを出し合いました。

事後、参加者からは「プロジェクトの進め方、アイデアの出し方、アピールの仕方など、新たな視点からの提案がとても勉強になった」、「自分の町には何が足りないのか知ることができた」などの感想をいただきました。

【お問い合わせ】
地域振興部 振興業務課
(研修事業担当)
☎03-6372-7305
🌐www2.dengen.or.jp/html/works/kensyu/index.html
✉kensyu@dengen.or.jp



「地元開催型」の「産品相談・商談会」が相次いで開かれました

当センターの「産品相談・商談会」事業は、様々なメニューを用意しています。そのなかで「地元開催型産品相談・商談会」は、皆様の地元で実施できるオーダーメイド型の事業として、毎回ご好評をいただいているメニューのひとつとなっています。

本年度は、12月末現在で、香川県丸亀市、新潟県魚沼市、和歌山県田辺市、千葉県銚子市の4市が、この「地元開催型」の「産品相談・商談会」を開催していただきました。

平成28年10月13日(木)・14日(金)の2日間、丸亀市の生涯学習センターで開かれた「丸亀『食』の相談・商談会」では、10の事業者の皆様が参加されました。面談では2名のアドバイザーによる事業者の産品についてのアドバイスがあり、その後、フールドコンサルタントの高橋貞男氏より講演がありました。参加事業者のほとんどの方から「満足した」という評価をいただく結果となりました。

平成28年11月2日(水)に、新潟県魚沼市では、「魚沼地域ビジネス交流会実行委員会」が主催して魚沼市堀之内体育館で開催されました。ここでは7事業者が参加し、百貨店等のバイヤーと面談を行いました。ここでは、ほとんどの参加者から「満足した」というアンケート結果を得ることができました。

また、平成28年11月9日(水)には、和歌山県田辺市で「田辺周辺広域市町村圏組合」の主催で、12の事業者が参加する「産品相談・商談会」が開かれました。さらに、平成28年11月16日

(水)・17日(木)の両日、千葉県銚子市「犬吠埼ホテル」で「株式会社農都共生総合研究所」の主催で「産品相談・商談会」が開催されました。19事業者へ3人のアドバイザーの面談が行われました。ともに、参加した事業者の皆様からは、「満足した」

というご意見をいただいております。

【お問い合わせ】
地域振興部 振興業務課
(産品支援事業担当)
☎03-6372-7305
🌐www2.dengen.or.jp/html/works/hanbai/sanpin.html
✉hanbai@dengen.or.jp



丸亀市



魚沼市



田辺市



銚子市



産品実践販売のご案内

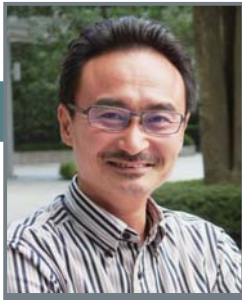
「産品実践販売」は、電源地域の特産品事業者の販売方向上を支援する事業です。消費費地においてテスト販売を行い、実施店からのアドバイスや消費者の反応を通じて、販売テクニックの習得や消費者ニーズの把握を図ります。「一般型」と「短期型」の2種類を用意しております。

「一般型」は大都市圏の百貨店や総合スーパー等の食品催事場で行うもので、「対面販売」が基本となっております。

現在、平成29年2月15日(水)から21日(火)までの7日間、福岡市の『博多大丸』での実践販売を募集しています。申込期限は平成29年1月6日(金)となっております。詳しくは、当センターまでお問い合わせください。

「短期型」は、消費者と直接コミュニケーションを取ることができる「マルシェ」や商店街での実施となります。

【お問い合わせ】
地域振興部 振興業務課
(産品支援事業担当)
☎03-6372-7305
🌐www2.dengen.or.jp/html/works/hanbai/sanpin.html
✉hanbai@dengen.or.jp



そねはらひさし
曾根原久司さん

KEY PERSON



農村のシーズを都市のニーズに繋げて農業活性化を目指す

各方面で活躍する「まちづくりのKEY PERSON」に地域活性化の視点をお聞きしています。今回は「NPO法人えがおつなげて」代表理事の曾根原久司さんに「地域農業の活性化」の視点をお聞きしました。曾根原さんには、平成29年1月開催予定の当センターの研修No.4「地域農業活性化策を学ぶ」の講師をお願いしています。

農村のシーズを都市のニーズに繋げて農業活性化を目指す

田舎には多くの資源、言うなれば「農村資源」があるにも関わらず、過疎や高齢化によって、それらの資源が放棄されたままになっているものが多くあります。

これまで、農村資源の活用を目指した商品の開発などの取組みが多く地域でなされてきていますが、なぜうまくいかないのか。それは、「マーケットイン」の発想が足りなかったからです。市場(マーケット)の「ニーズ」を捉えた商品開発をするという発想が重要なのです。

事業成立のために最も重要なのは、「シーズ」(タネ、素材、資源)×「ニーズ」という考え方です。農村資源の有効活用法として、この考えかたに、「農村資源」というシーズと、都市のニーズとを掛け合わせて考えればよいのです。都市にはボリュームの大きいニーズがありますから、農村資源と都市のニーズを結びつけることで、それだけ多くの農村のシーズを活用できることになります。

農村資源(シーズ)と都市の「ニーズ」を結びつける事業としては、「農業の6次産業化」、「グリーンツーリズム」、「森林資源の建築不動産活用」、「自然エネルギー事業」、「情報や健康・福祉などのソフト産業」など、5つくらいの事業が考えられます。

例えば、これまで私が自治体と取り組んだ事業のなかに、北海道・北竜町での事例があります。

北竜町では、ひまわりを町の観光資源としていましたが、その種は全く活用されていませんでした。一方で、近年の都市の「ニーズ」は安心・安全な食料油にあり、企業もそのような消費者のニーズをとらえた商品開

発に取り組んでいます。そこで、大手の食品会社に、ひまわりの種の食用油への活用を申し出ました。都市のニーズと、ひまわりの種というシーズを掛け合わせたのです。その結果、話が進み、来年2月には北竜町のひまわりの種を使った「ひまわり油」が発売される運びになっています。

他にも、大手不動産企業と連携した森林資源の有効活用という事例があります。

山梨県、大手不動産企業グループと私どもで、山梨県産材の利用拡大の促進に向けた協定を結び、山梨県産の間伐材を使用した建材の開発、流通に取り組んでいます。国内のメーカーの建材の国産化率は10%以下であるのに対し、今や、その企業の建材の国産化率が50%となっています。これも、使われていない農村資源を活用した分かり易い事例です。

「シーズ」を掘り起こし「ニーズ」を見つける農村起業家を育成

これまでの農村地域では、シーズ×ニーズの発想が根付いていないのが現状です。それを解決するために、都市のニーズ×農村資源のシーズを結びつける発想をもった「農村起業家」を育成することが、農村地域の活性化のカギになると考えています。そのため、私は全国の自治体で、農村起業家育成のための仕掛け作りなども行ってきています。

そういった発想を持った農村起業家が、地域に一人でも育てられることで、今まで眠っていた農村資源

が表に出てきて動き出します。注目が集まり、お金の循環も始まります。そうすると、事業に参加する人も増えます。だから一人でも起業家を育てていくことが大事なのです。

求められる自治体の視点と役割

農村資源の有効活用のためには、当然ながら、行政にもシーズ×ニーズの発想が必要になってきます。行政は地域を俯瞰できますから、自らの地域の資源を、ボリュームのある「ニーズ」に結び付けていく考えが必要でしょう。

また、行政の重要な役割の一つは人材育成の支援です。日常的に地域内で「起業家」になれそうな人を見つけ、そういった人たちに都市のニーズに関する情報を提供する、起業家同士を結び付ける出会いの場を設ける、などのサポートが重要です。

また、全国でNPO法人などの中間支援組織による、企業家育成のための仕掛け作りが行われています。そうした取り組みの事務局作業は自治体が得意とするところです。中間支援組織と連携し、人員募集や告知など細々とした仕事を積極的に担っていただきたいと思います。

人材育成はそれほど簡単ではないかもしれませんが、一人でも起業家が育てば、そこにノウハウが移転され、まわりが刺激されて活気づいてきます。その人のまわりに人が集まります。そうして地域が変わっていくのです。(談)

略歴

1961年長野県に生まれる。1985年明治大学卒業後、経営コンサルタント等を経て、1995年東京から山梨の農山村地域へ移住。2001年NPO法人えがおつなげてを設立。耕作放棄地や森林資源といった農村資源の活用を、多数の企業との連携で行うことによって、農村の活性化に取り組んでいる。現在は、山梨県のみならず、北海道から沖縄の全国の農村地域の活性化の支援や地域の人材育成を、総務省地域力創造アドバイザーなどとして取り組んでいる。

【主な表彰】■日経ソーシャルイニシアチブ大賞 大賞 (H26年度)/主催:日本経済新聞社 ■日本農業賞大賞受賞食の架け橋の部 (H25年度)/主催:日本放送協会・全国農業協同組合中央会・都道府県農業協同組合中央会

【主な著書】『日本の田舎は宝の山』、『農村起業家になる一地域資源を宝に変える6つの鉄則―』(両著とも日本経済新聞出版社)